

「幻の「源氏物語絵巻」をもとめて・続」総括

小嶋 菜温子

本国際シンポジウムは、二〇〇八年開催の「幻の源氏物語絵巻をもとめて」(於：立教大学)の発展として企画したものである。近世初期に成立した問題の豪華絵巻は、『源氏物語』享受史のみならず、日本文化史のミッシング・リンクとしての重大な意義を孕む点で、各界から注視されている。立教大学文学部日本文学専修を基盤とするプロジェクトの活動において、この絵巻の断簡をニューヨークで発見し、『源氏物語と江戸文化』(小嶋・小峯・渡辺編)のなかで紹介したことによって、学界やメディアからの注目が集まった経緯に基づき、立教大学におけるシンポジウム連続開催となった次第である。前回のシンポジウムにおいて、テーマである近世初期成立の謎の豪華絵巻の解明への糸口を掴むことができたが、今回のシンポジウムはさらなる探求のための広汎な議論を行うべく計画した。美術史学・文学の領域を超え、国内外の関連研究者の知見を終結する形でのプログラム構成で臨んだ。報告部門とコメント部門に加えて、討議の部門にも力を注げるような布陣を敷き、総勢十五名の専門家によるラウンド・テーブルの場を設けることとした。

上記の趣旨と計画に基づき開催した本シンポジウムでは、想定どおりの成果を収めることができた。まず、報告部門では、徳川本「桐壺」の意義についての吉川美穂氏の報告において基礎的な報告付けがなされた。京博本「葵」についての松岡知華氏の報告においては、メトロポリタン美術館本「葬礼図」の定位に関する新しい調査報告もなされ注目された。

製作者と図様分析に関するエステル・レジエリー・ポエール氏の報告においては、「源氏絵」を含む物語の絵画化への視座が示され有意義であった。近世初期の源氏学についての海野圭介氏の報告においては、広汎な享受史を背景とする『源氏物語』の受容の実態が詳らかにされ傾聴された。コメント部門では、上記報告を踏まえての、さらなる傍証や検証が加えられた。さらに最終の討議部門においては、総勢十五名の専門家による徹底討論が行われた。討議部門だけでも二時間を費やし、シンポジウム全体では六時間にわたる充実した会議となった。残余の断簡探し、注文主・製作者・絵師完全なら解明には、今後もさらに調査の時間を要しようが、本シンポジウムはそのための大きな足掛かりとなった。

本シンポジウムの計画段階ではとくに公刊についての具体的なプランは立てずに置いたが、シンポジウムが成功裡に終了して、あらためてその成果の公開の必要を感じた。美術史研究と日本文学研究との相互乗り入れによる論集の形で、本シンポジウムの成果を広く世に問うことで、問題の豪華絵巻の文化史的意義の解明のみならず、あのような絵巻を生み出した近世初期の京都文化圏の解明を目指すことの意義はきわめて深いと考えられる。この成果の公刊が実現すれば、『源氏物語と江戸文化』に続く、立教大学を基盤とするプロジェクト活動の成果を示すこともできよう。日本文化史の再検討という大きな見通しのもとで、今回のシンポジウムの成果を形にする予定である。(本学教授、日本文学研究所副所長)